

前へ

FJ-1600



DIRECTION SHUHEI NISHIZAKI
TEXT BY AKIHIRO KOMIYAMA
PHOTO BY SADAHO NAITOH



**水野昇太選手を応援して下さる
スポンサーを募集しています。**

—(お問い合わせ先)—
フェイム事務局
〒604京都市中京区六角通烏丸東入ル
大輝六角ビル2F
Tel (075) 256-7558 担当/西堀・片田



LAP9 BRIGHT EYES

「レーサーというのは、一般にスピードという特殊な世界を生きる限られた人間というイメージがあるけど、キミは自分がその限られた人間だと思う?」

水野昇太と初めて出会ったとき、いきなりこう尋ねた覚えがある。

そのとき彼はアッサリとこういった。「レーサーに限られた人間?別にそんなことを意識したことはないですね。けっこう普通です。そんな大層な人間じゃないですよ、今の僕は……」

意外な答えだった。それは彼を取材し始めて数か月経った今でも覚えてる。

それまでレーサーというものは自尊心や自己顕示欲が強い人種、という観念があったのだが、初めて彼と交わした言葉からはそういったものが一切感じられなかったのだ。誰もがもつレーサーは特別な人間という先入観念は、最初のインタビューから打ち砕かれた。今でも「もう少しカッコいいこと言えはいいのに」と、こちらが余計な心配をしてしまうほど、彼は自分自身を飾らず表現する。

「FJ」というクラスはお金さえあれば、誰でもマシンに乗れるし、レースに参加できるんですよ。だからFJレーサーは限られた人間なんかじゃなく、普通の人なんです。このクラスのレースじゃ食っていけないから、僕だって普段は真面目に働く同じ労働者ですよ」

確かにレース以外のときの彼は日夜働く、ごく普通の青年。仕事場で彼を見て普通以上に感じるの、きつと「良く働く人」くらいのことだろう。

そういった面からみれば、彼はまぎれもなく普通の青年なのである。しかし、彼がレースマシンを見つめるとき、その瞳の奥に光る輝きは決して普通の人にはないものをもっている。

その輝きは、仕事で稼ぐすべての報酬、さらに足りない分は借金までして真剣に打ち込む、レースへの一途な思いの表れに違いない。

同年代の普通の青年が仕事で稼いだ報酬を余暇や単なる趣味、あるいは彼女に使い、平凡な楽しいときを望むのに、彼はそんな平凡さに見向きもせず、自分の夢を実現するためレースにすべてを捧げているのだ。

「抽象的な夢を、曖昧にやりすごしていく人の多いこの現代社会で、これだけ具体的な夢を一途に追いかける彼を“普通の人”と呼べるのだろうか?」

取材で彼と話していると、そういった思いが、自然と膨らんでいく。だが、彼はいつも自分を普通だと言った。

「だってね、夢なんて誰でも追えるんですよ、追う気さえあれば……」追える」というのは普通のこと、それを現実にできる人のことを「普通を越えた人」というんだと思うんですよ」

取材を始めてひと月後だったろうか、この言葉を聞いて初めて彼のいう「普通」の意味がわかったような気がした。彼がいう普通とは第三者からの視点でいうわけではない。彼の常に自分を見つめた視点で「まだ普通の人」だといっているのだらう。

つまり、レーサーとしてトップを目指すならば、FJというカテゴリーにいる彼は、決して限られた人間などではなく、どこにでもいる人、なのだ。

だから、このクラスにいる自分を、限られた人間と称さず、本当に限られた人間になるときまで、自分をあえて普通といっているのだらう。

そういえば、「キミが今まで「今日の最高だったなあ」って思えたのはどのレースだった?」と尋ねたとき、彼はこういつていた。

「……まあ、自分で「あのときのレースは最高によかった」なんて言うようになったら、そのレーサーはもう終わってますね。レーサーが思い出話をするようになったら、向上心がなくなつたということですから……」

常に上を見続ける彼にとつて、頂点に立ったときこそ普通でなくなる。だから、今の自分は普通以外のなものでもない、と彼は考えているのだらう。「オレはこんなところにいるべき人間じゃない」今、彼はそう思っているはずだ。

が、勘違いしないでほしい。彼は奢りていつているのではない。そういわせているのはむしろ歯がゆい想いだらう。

なぜなら、それは彼がまたこのカテゴリーをどうしても越えられないから。

彼はテクニクで上のカテゴリーでも十分に太刀打ちできる自信がある。レース展開もこの約2年で多くのことを学び成績も残した。好景気のときなら、これだけの条件で、何の問題もなく「来年はウチで乗ってくれ」と、各チームから誘いがきたものである。

しかし、バブル経済の崩壊以降、プロレーサーがカテゴリーアップするために、スポンサー探しというものが、テクニクや成績以上の必要条件となつていった。

FJまでなら、何とか自分の稼ぎと借金だけでレースができる。が、そこからカテゴリーが上がると連れて多大な資金が必要となる。

生活サイクルがレースと仕事で目一杯なFJレーサーは、それ以外の時間を過ごすことがかなり難しい。だから、スポンサーを探す時間をつくるのは至難の技。

またたとえ自由な時間ができたとしても、この不況では簡単にスポンサーが見つからないというのだ。大袈裟にいうならレ

ースでいくら結果を出しても、スポンサーを見つければ、現状ではそれ以上のカテゴリーアップの望みは薄いのである。

そんな状況にいる今の自分を奮い立たせるため、彼はあえて「普通」といい続けているに違いない。

「オレはここでは終わらない。決して普通じゃ終わらないんだ。絶対に限られた人間、トップカテゴリーのレーサーになつてやる」

こういった彼の秘めたる思いが、余計な言葉を語らず「普通の人」といわせているように思えて仕方がない。

先日、彼に、初めて出会ったときと同じ質問をしてみた。すると彼はニッコリ笑ってこういった。

「僕はまた普通の人ですよ。だけど近いうちに必ず限られた人間になりますからね。見ていてください……」

彼の瞳の光はさらに輝きを増していた。その輝きは、限られた人間の光と同じものに確かに近づいている。

